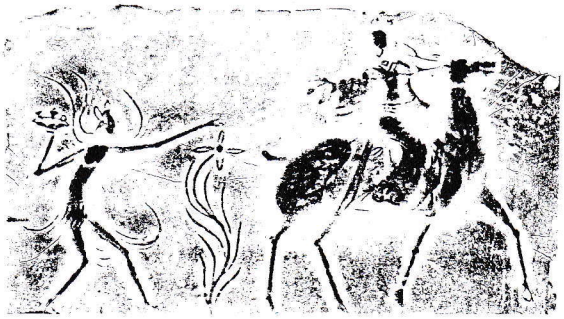

大分県書道　令和７年９月号　No.４２３

「三つのH」

理事　児玉元治（韜光）

過日、幼稚園運営協議会、小学校運営協議会に出席しました。先生と子どもの熱気のあふれる声が響き合い、生き生きと活動している授業、だれもいない職員室、行き届いた校内環境等を参観できました。その後、協議が行われ、校長先生より学校経営等の話がありました。その中で課題をいくつか話されました。

一つは職員が休暇（病気や出産等）を取得した際に代替の教員が派遣されない。代替の教員がいないのが現実のようです。それで教頭先生も授業をしているとのことです。

二つめは以前に比べて不登校や支援を必要と思われる児童が増加しているそうです。中学校では『中１ギャップ』をなくす「スロースタートプログラム」に取り組んでおり24年度の不登校生徒数は前年度より98人減少したとのことです。支援学級も以前に比べて増加傾向にあります。

なぜ不登校、支援を必要とする子どもが増加したのでしょうか。お茶の水女子大学名誉教授の内田伸子先生が原因を次のように述べられています。「ＡＩ時代に負けない生きる力を育む子育て」という対談で、「今の日本は落ち着きがない。周りとコミュニケーションがうまくとれないなど問題のある子どもが増えている。それはスマホやタブレットの普及を含め、時代が変化していく中で人と人、保護者と子どもの触れあいが薄れている。普段から子どもにしっかり向かい合い密なコミュニケーションをとること。子どもたちの興味関心に基づく自発的な遊びの時間を大事にし、『洗練コース』と呼ばれる三つのH〈褒める・励ます・（視野を）広げる〉を意識した言葉かけをすることです。こうした共有型しつけを受けている子どもの語彙力は高い。他の子どもと比べるのではなくその子の過去と比較して成長を褒めてあげる、勉強する意義を伝えて視野を広く持たせるなど親自身が子どもと楽しい経験を共有したいと思って行うのが共有型しつけです。この逆が強制型しつけです。禁止や命令を多用し子どもに考える余地を与えない言葉がけをする。これでは自分で主体的に考え、行動しなくなります。」（以下略）

私は意欲をなくす三つのS〈指示する・叱る・せかせる〉を使うことが多かったように感じます。書写・書道を好きにさせる方法として、三つのHの意義を考えてじっくりと指導するよう心がけたいと思っています。

（月刊誌『致知』から一部引用）